

令和4年度 第2回南アルプス IC 周辺高度活用計画検討委員会
議事録（要旨）

日 時	令和4年9月16日（金） 14:00～15:40	場 所	市役所本庁3階 大会議室
<p>次第</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 開会 2 委員長あいさつ 3 議 事 <ol style="list-style-type: none"> (1) 委員会における検討のポイントについて (2) 委員会における検討フローについて (3) 市民ワークショップについて 4 閉会 <p><以下、議事録>（議長：佐藤委員長）</p> <p>議題（1）委員会における検討のポイントについて</p> <p>議題（2）委員会における検討フローについて</p> <p>一括して、事務局より資料「第2回 南アルプス IC 周辺高度活用計画検討委員会資料」にて説明。</p> <p>【各委員の主な意見】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ゾーニングは後でよくて、本委員会で大事なことはコンセプトを詰めること。 ・例として、高速道路の整備は、物流の可能性はあるが、物流はほとんど自動化しており、雇用が生まれにくい。企業ニーズだけで来てもらうことが市にとっていいことなのか考える必要がある。また、高速道路ができたところで、企業にメリットがなければ来ない。市の発展のために協働してくれるような企業、産業、人を見つけることが大事になる。企業誘致の際、何でもいいから来てくださいというのは企業にとって魅力がない。 ・産業として、特に農業は食糧安全保障の点からも、今後重要になってくる。 ・自治体の計画というと、多様な人の意見を聞き、地元の満足度を高めつつ、外からも人を呼びたいという両方が織り込まれた中途半端なものになる。成功している事例はアートやスポーツ等、独創的なテーマを決めている。そのテーマは、今ここにいる人々まで脈々と続いてきた地域に根付いている血や汗、涙、温かみとか、人間の生々しい匂いが大事であり、土地や産業をどう生かすかを考えている。これから集中投下すべきことは、外に向けて発信するのではなく、地元民や子供孫世代の住みやすさを考える方向性はあると思う。資源が残っていて、ここにいる人達を大切にしていけば、もっと伸びる要素がある。合理的にパッケージ売りをする大企業でなく、一緒にまちを作り上げていく感覚であれば、20,30代の若いベンチャー企業家に、まちの人たちが伝統文化を教えながら、一緒に作り上げていくような手の組み方は非常に新しく、いい仕組みだと思う。 ・高齢化が進み、農地が利用されていない。法人化できないか。給料を保障すれば安心感があ 			

り若い人達も来やすい。また、ドローンや自動工作機など農業の自動化の研究や製造できる企業を誘致し、タイアップして協力し合いながら進める形が面白いのでは。

- ・儲かる農業ができれば就農者は増加する。また、綺麗な水によりとても美味しい果物ができる。ただ、小粒や規格外のために廃棄する量も多く、それらを使ってくれる企業に繋がらないか。加工品を作っている若者もあり、見た目は悪いけれど、加工品を作るための果物も作れるので、そこを企業と連携し、市のいいものをさらに全国に広げられるのでは。
- ・IC 周辺の土地の多くが休耕地である一つの原因が、地力がなく、掘れば石だらけであること。特に IC 西側はそのような土地が多い。また、コストコに来る人の流れを活かす企業を調査し、色々な企業を見る中で判断がしたい。
- ・南アルプス市の農業はさくらんぼや桃、ぶどう、梨と多様な作目を扱うことが特徴である。農地はあるが、使える土地なのかそうでないのか明確にしないと新規就農は難しい。制度化・見える化し、サポートするだけでも、就農の難易度が下がる。
- ・儲かる農業よりも個人で好きに働けることに魅力を感じている。きちっとやれば稼げる上に豊かな暮らしがある。好きな作物を誰に売るかも決めて営農できるのはこの土地の利点である。利点を明確に整理すると他との差別化もできる。
- ・何をする場合でも賛成と反対があり、10,20 年先の話に正解はない。柔軟にその時の情勢に合わせて変更することも視野に入れるのだが、できるだけ多くの人に納得感を持ってもらうことも大事である。過去から現在、未来を網羅的に見渡した時に、おそらく繋がるものが農業であり、一次産業全般だと思う。
- ・3000m 近い標高差がある中で非常に多様な生物が生息している。縄文時代から暮らしがあり、棚田では、弥生時代から米作りが始まり、平安時代のお祭りを現在まで繋げてきたような、歴史と文化と自然の大地がある。棚田の石垣は楕円山から崩れ流れてきた石を組んでいる。利点を繋ぎながら、扇状地では桑畑が今は果樹園であるが、温暖化が進行し、また変化する。その時代の情勢と合わせて産業は変化していく。まちの魅力は、その自然、気候、風土の変化とともにここで知恵を出し、この土地で暮らしが繋がってきているところ。自然や暮らしの宝物を見て・感じてもらうことが本来の観光。観光産業もみんなで作り上げられたらいい。
- ・発展性がある変えられるコンセプトの上に成り立っているものもいい。それが独創的なものであることに賛成である。商品づくりでいうと、2,3 割がおいしいといったものが大ヒットする。強烈なファンがいた方がいいのかもしれない。特徴として農業や自然のポテンシャルをさらに引き出すものは何なのかをもう一度掘り下げ、コンセプトを設定すべきである。
- ・就農者の平均年齢は 70 歳を超え、後継者がおらず、耕作放棄地が増えるのであれば、大規模な農業として農業の M&A など大胆な方式をしたほうがいい。
- ・子育て世代の転入が超過していることは明るいニュースであるが、10 代後半から 20 代前半の多くが首都圏に出て行く中で、戻り先をどのように作るかが大事である。希望する仕事がないという調査結果もよく見る。特に女性が希望するようなキャリアが作れていない。
- ・使用されていない農地の流動化がされていない。
- ・東京から離れて丁度いい距離に自然があることと果物がある。農業や自然は大きな魅力であり、観光も力を入れるべき分野だと思う。

- ・ IC 周辺にはあまりいい農地はなく、現に農地の利用がなく、大規模な農業や観光には向いていない。
- ・ IC 周辺に絞り込んだ範囲での計画を討議してほしい。コストコの出店による渋滞を考えたときに、関係した土地が必要でないか。
- ・ 稼げる産業基盤をどう作るかが重要である。市の財政力指数は平均より低い。
- ・ とある菓子メーカーでは桃やシャインマスカットを製造し、全国に販売しているが、農家に作り方を徹底的に指導している。企業と連携すれば稼げる農業になる。
- ・ 農業は資材の高騰も問題である。農業はエネルギー問題を解決しなければならない。カーボンニュートラルといった視点も踏まえる必要がある。
- ・ 農業の魅力を PR していかなければならないと感じた。ただ、魅力を発信してから新規就農者が増えるのに、とても時間がかかる気がする。IC 周辺では集客を第一に考え、経済、豊かな社会といった繋がりだと時間の整理がつかない。魅力発信できれば、最終的には魅力あるまちづくりができるという流れに賛成はできるが、その理想を追い続けていくべきものなのかわからない。

議題（3）市民ワークショップについて

事務局より資料「南アルプス IC 周辺市民ワークショップ資料」にて説明。

【各委員の主な意見】

- ・ 玄関口や新産業拠点の創出という位置づけを示すと、その言葉に引っ張られて考えてしまい、自由度がなくなる。
- (事務局) 市の総合計画や都市計画マスタープランにより位置づけられていることからご理解いただきたい。
- ・ 企業版ふるさと納税に参加できるような、例えば育成とかの仕組みを作りたい。

以上